

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：32630  
研究種目：若手研究（B）  
研究期間：2008～2011  
課題番号：20720119  
研究課題名（和文） 日本語の活格性にまつわる記述的研究

研究課題名（英文） Split Intransitivity in Japanese

研究代表者

竹内 史郎（TAKEUCHI SHIRO）  
成城大学・文芸学部・准教授  
研究者番号：70455947

研究成果の概要（和文）：本研究は、時代語や諸方言を含めた日本語の格標示体系のうちに、これまで認識されてきたものとは異なる新しい性質を見出そうとするものである。すなわち、日本語に活格性が認められることを確かめ、その性質を詳しく記述することを目的とする。本研究の主たる成果は、次の二点に集約される。

- (1) 有形格助詞の個別的な振る舞いに認められる活格性
- (2) 主節の格標示体系に認められる活格性

(1) の成果については次の通りである。奈良時代語の活格性にまつわる有形格助詞として格助詞ヲ、格助詞シ、格助詞イ等を取り上げ、それらの振る舞いを記述した。その結果、格助詞ヲと格助詞シは非動作格（inactive）として、格助詞イは動作格（active）としてそれぞれ特徴づけられる。また、(2) については次の通りである。平安時代語の主節に見える主語や目的語として現れた無助詞名詞句を採取・分析した結果、古代日本語の主節においては、〈動作主〉主語と〈対象〉主語の振る舞いが異なり、〈対象〉主語はむしろ他動詞文の目的語と同様に振る舞う。古代日本語の無助詞名詞句は意味役割によってその振る舞いが決定されていると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research was carried out with the main focus on the following two points which will lead to the new character of case marking system in early old and old Japanese.

- (1) Active-inactivity of case markers, *wo*, *si*, *i*.
- (2) Active-inactivity of a case marking system that consists of null arguments in main clauses.

Differing from modern Japanese, in early old Japanese case particle *wo* marks not only objects but also subjects of inactive intransitive verbs. Case particle *si*, which is peculiar to early old Japanese, marks only internal arguments in the same way as *wo*. Therefore, *wo* and *si* are characterized as an inactive marker. Case particle *i* marks only subjects of transitive verbs and active intransitive verbs. Therefore, *i* is characterized as an active marker. On the other hand, I discussed a case system of main clauses that consists of null arguments in old Japanese. The conclusion is summed up in the following. The case system of main clauses in old Japanese is a system that neither accusative nor ergative, but rather a system that conceptually neutralizes this division, a system unmarked as to accusative or ergative.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史

1. 研究開始当初の背景

奈良時代の日本語では、「山を高み」「旅を苦しみ」といった原因理由節が頻繁に用いられる。このミ語法について筆者はいくつかの側面について考察を加えてきたが、なお残された問題として、節の内部に格助詞ヲが現れることがある。ミ語法のヲ格名詞句は形容詞の一活用形である「形容詞語幹+ミ」に係ることに加え、直接の対応物が現代共通語に存在しないこともあって十分に理解されているとは言えない。この問題について、筆者は、形容詞構文と考えられるミ語法にヲが現れるのは奈良時代語の格標示体系に含まれる特性、すなわち活格性によるものと解釈することで説明が与えられるとの見通しを持っていた。さらには、姉妹関係にある古代琉球方言の活格性も並行して研究することで、時代語や諸方言を含むより広い日本語の性質として活格性を考えるという着想を得ていた。

以上のことに加え、時代語や諸方言を含め、これまで日本語に活格性が存在した（あるいは存在する）ということが十分に検証された研究はない。例えば、従来の研究では、奈良時代語の格標示体系に活格性が認められるとの指摘はあるが、証拠の提示やデータの整理に関して不十分さが残る。また、かつての喜界島方言の格標示体系についても、今のところ、主語名詞が有生性を有する場合に限り認められるとの結論で落ち着いているが、この活格性のあり方についてなお検証していく余地があるように思われる。

2. 研究の目的

既述のように、時代語や諸方言を含め、これまで日本語に活格性が存在した（あるいは存在する）ということが十分に検証された研究はない。本研究は、日本語に活格性が認められることを確かめ、その性質を詳しく記述することを目的とする。この意味で本研究は、特定の共時態における言語現象にとどまる

のではなく、時代語や諸方言を含めた日本語の格標示体系にこれまで認識されてきたものとは異なる新しい性質を見出そうとするものである。

3. 研究の方法

本研究のデータは主に文献を調査することによって得られた。奈良時代語の調査では、『萬葉集』を始めとし『古事記』『日本書紀』『続日本紀宣命』等の資料を用いた。平安時代語の調査では、『土左日記』『大和物語』を用いた。そして、平安時代初期の訓点資料については『小川本願経四分律古点』『成実論天長点』『西大寺本金光明最勝王経古点』等を用いた。またさらに、古代琉球方言の調査では『おもろさうし』を用い、適宜、現代琉球方言におけるデータも参照した。

文献等から得られたデータは、当該の格助詞とこれによって標示される名詞句が担う文法関係との対応がどのようなものかという観点から分析され、この観点から、当該の格形式が、他動詞の主語、他動詞の目的語、行為性の自動詞の主語、非行為性の自動詞の主語のうちでどれ（とどれ）を標示することになるのかが明らかにし、当該の格が名詞句を標示する際の基準を導き出した。

また、考察の際、対格型である現代共通語の格標示体系との差分に着目したり、姉妹関係にある奈良時代語の格標示体系と古代琉球方言の格標示体系とを比較・対照したりすることで、両者の活格性のあり方について重要な手がかりが得ることができた。

4. 研究成果

本研究の成果は、次の三つの観点から整理される。

- (1) 上代語における格助詞ヲ、格助詞シ、格助詞イの振る舞いについて
- (2) 主節における格標示体系について
- (3) その他周辺領域

まず、(1)に関する成果は以下の通りであ

る。奈良時代語の活格性にまつわる有形格助詞として格助詞ヲ、格助詞シ、格助詞イを取り上げ、それらの振る舞いを記述した。その結果、格助詞ヲは現代語の格助詞ヲとは異なり、他動詞の目的語のみならず、非行為性の自動詞の主語をも標示し、非動作格 (inactive) と特徴づけられる。また、格助詞シについてもその標示がほぼ内項のみに限られ、同じく非動作格 (inactive) と特徴づけることができる。これに対し、格助詞イはその標示が他動詞の目的語と行為性の自動詞の主語に限られ、非行為性の自動詞の主語を標示することがない。このような現象から、格助詞イは動作格 (active) として特徴づけることができる。また、ヲ、シ、イのいずれの形式においても格助詞のみならず間投助詞が認められる点に着目し、三者は共通する助詞の機能変化のあり方を示していることを指摘した。

次に、(2) の成果について述べる。本研究では、有形格助詞の個別的な振る舞いの記述にとどまらず、より体系的な観点から、すなわち格標示体系の観点から考察を行った。その結果、特に、主節において無助詞名詞句として実現した述語の項の振る舞いが明らかになった。このことをより詳しく述べれば次のようになる。

資料は土左日記、大和物語を用い、そこに見える主語や目的語として現れた無助詞名詞句を採取し、分析を行った。この結果、古代日本語の主節では、〈動作主〉主語と〈対象〉主語の振る舞いが異なり、〈対象〉主語はむしろ他動詞文の目的語と同様に振る舞うこと、古代日本語の無助詞名詞句は意味役割によってその振る舞いが決定されていること等が明らかになった。さらには、無助詞目的語とヲ格目的語の統語上の振る舞いの違いにも言及し、こうした無助詞目的語とヲ格目的語の振る舞いの違いが、古代日本語の無助詞名詞句の振る舞いが意味役割により決定されていることの根拠となり得ると述べた。

最後に、(3) の成果について述べる。この成果の一つ目として、奈良時代語の活格性を考える上で重要なファクターとなるミ語法の係り先について詳しく論じた。すなわち、ト節に含まれたミ語法の係り先について、従来の研究では、定説を見なかったが、今回の考察においていくつかの根拠を示し、その係り先がト節を越えるものではないことを論じた。

二つ目として、ツツアルというアスペクト形式の文体上の分布を歴史的に明らかにした。ツツアリという形式自体は、上代文献からすでに存在しているが、中世以後、文献から姿を消し、そして江戸時代後期から近代にかけて再び用いられるようになる。以上をふ

まえると、古代語のツツアリが復活したかのように見えるが、中世以前のツツアルは話し言葉で用いられており、江戸時代後期以後のツツアルは書き言葉で用いられるという点で、両者は別個のものと考えられる。また、ツツアルの再生は、欧文翻訳が契機となったことも併せて論じた。

三つ目としては、近代から現代におけるツツアルの意味変化および、ツツアルとテイルから成るアスペクト体系の変化について論じた。すなわち、近代語以降のツツアルには〈(不完成) から〈変化進行〉へ〉という意味変化が認められること、また、この意味変化はテイルとの張り合い関係から生じていること等を論じた。

これらのツツアルの研究は、一見日本語の活格性と無関係であると感じられるかもしれない。しかし広く世界の言語を見渡したとき、活格性と述語のアスペクチュアルな性質が密接な関係にあることはよく知られた事実であり、日本語の活格性についても同様に、述語のアスペクチュアルな性質を考えるとなしに論じることはできない。以上の研究は、このような意味で、筆者のアスペクト研究の「入口」ということになる。

本研究課題は、現在の方向性を継続して推進していくことができる。本研究の成果をふまえ、格標示体系の歴史的変化や、方言の格標示体系の記述等へと展開していくことが予想され、波及するところは小さくないと考えられる。ただし、より本研究の基盤を確かなものにするため、成果についての多角的な検証と研究の進展についての慎重な吟味は不可欠と考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

- ① 竹内史郎、「古代語の動作主標識をめぐって——助詞イと石垣法則——」, 高山善行・福田嘉一郎・青木博史(編)『日本語文法史研究』, ひつじ書房, 近刊, 査読無
- ② 竹内史郎、「古代日本語の主節の無助詞名詞句——活格性との関わりから——」, 『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 国立国語研究, 23~32頁, 2012年, 査読無
- ③ 竹内史郎、「近代語のアスペクト表現についての一考察——ツツアルを中心に——」, 青木博史(編)『日本語文法の歴史と変化』, くろしお出版, 151~173頁, 2011年, 査読無
- ④ 竹内史郎、「不透明化しつつある「国語」という概念」, 成城学園教育研究所(編)『成城教育』, 157号, 4~9頁, 2011年,

査読無

- ⑤竹内史郎, 「ツツアルの歴史的展開——文体差に着目して——」, 成城大学国文学会(編)『成城国文学』, 27号, 1~12頁, 2011年, 査読無
- ⑥竹内史郎, 「ト節にミ語法を含む構文——助詞トによる構文補記——」, 萬葉語研究会(編)『萬葉語文研究』, 第6集, 89~107頁, 2011年, 査読有
- ⑦竹内史郎, 「「旅」考」, 大阪大学国語国文学会(編)『語文』, 92・93輯, 24~33頁, 2010年, 査読無
- ⑧竹内史郎, 「助詞シの格助詞性について——非動作格と品詞分類——」, 群馬大学語文学会(編)『語学と文学』, 44号, 9~23頁, 2008年, 査読無
- ⑨竹内史郎, 「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」, 『國語と國文學』, 85巻4号, 50~63頁, 2008年, 査読有

[学会発表] (計5件)

- ①竹内史郎, 「古代日本語の主節の無助詞名詞句——活格性との関わりから——」, 第1回コーパス日本語学ワークショップ(2012年3月5日, 国立国語研究所)
- ②竹内史郎, 「日本語のAspect形式の主観性と主観化」, NINJAL共同研究「日本語文法の歴史的的研究」研究発表会(2011年8月30日, 九州大学)
- ③竹内史郎, 「近代語のAspect表現についての考察——ツツアルを中心に——」, 関東日本語談話会(2011年1月22日, 学習院女子大学)
- ④竹内史郎, 「ツツアルの歴史的展開」, 成城大学国文学会(2010年10月30日, 成城大学)
- ⑤竹内史郎, 「「旅」の意味について——上代語と現代語を対照しつつ——」, 国語語彙史研究会(2009年9月19日, 神戸親和女子大学)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹内 史郎 (TAKEUCHI SHIRO)  
成城大学・文芸学部・准教授  
研究者番号: 70455947